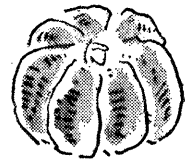


お誕生会

周郷先生の講演をきいて



蕪 木 寿 江

どこかでお花が咲きだすように

なんだかうれしい誕生日

どこかでなにかがまわってるように

なんだかうれしい誕生日

周郷先生の詩に、溝上先生の作曲のメロディーが小さくなりだします。すでに母の会で指導ずみの曲なので、招かれたその月のお母様の中には口ずさんでいらっしやる方もあります。繰り返しレコードをかけているうちに、椅子に腰かけてお誕生会を待っている年長組の子どもたちが、

「なんだかうれしいたんじょうび」の終りのところだけを少しずつ歌ってきます。

なにかが、ここで、あそこで、動きだし、まわりだしたように、だんだんとお母様方と、子どもたちの声が唱和していきます。

ここでお誕生会が始まります。園長からカードが渡され、お祝

いの言葉があり、その月のお花のかんむりをつけたお誕生月の子どもが、自分の名前をマイクで言ってから、クラスの先生からの紹介があります。

——「智彦ちゃんは、大きくなったら、市が尾幼稚園の先生になって、小さなお友達といっぱい遊ぶんですって、やさしい元気な先生になるでしょうね。先生方も待っていますね」

——「勇ちゃんは、虫取りの名人です。一緒に探しても、先生には見えない虫が、勇ちゃんにはよく見えるのね。虫が好きだと、虫の方から勇ちゃんのところへ寄ってくるのかしら」

——「みさきちゃんは、絵を描くのが大好きなの、この間の幻燈のあと『おむすびころりん』の絵を三枚つづきで描いたのよ。紙芝居みたいでしょう」と言っていて見えます。

不思議な六歳にめぐり会った喜びを噛みしめて、具体的に、その子の言葉や、行動を話します。写真の貼ってあるカードにも、

成長を喜び祈る気持で、一人、一人にそれぞれの感慨を書きま
す。

——お花が咲く四月、つばめが飛んでくる四月、純ちゃんの涙が
飛んでいく四月、お誕生日おめでとう。

——六歳って不思議なとし、ぶらんこがすいすいこげるようにな
ったとし、お友だちが「かずちゃん、あそぼう」って、呼ん
でいるとし、六歳おめでとう。

——明子ちゃんのやさしい心は、どなたからいただいたの。おじ
いちゃんからかしらおばあちゃんからかしら、それともパ
パ、ママからかしら、それともたなばたのお星さまからかし
ら——。

——兎さんとお話が出来るさっちゃん、兎さんが何が好きか、ち
ゃんと知っているさっちゃん、兎さんの声が聞こえるみた
い。

——新ちゃんの歌声にお庭の木の葉が踊ります。赤とんぼが、お
窓でそっときています。もうこわいお怪我はしないでね。

——てっちゃんは、みんなをゆかいな国へ連れていってくれる機
関車の運転手です。

象徴的でなく、その子どもでなければ持っていないよさを、で
きれば季節の感覚と合わせて書きます。元気がない子には、励ま

す言葉を探し、落ちつかない子には自信をつけさせ、乱暴な子に
はやさしい面を強調し、この六歳の誕生日に何かのチャンスをつ
かむことができたらと願います。

長い将来の間に、心が荒れた時、解決できない壁にぶつかった
時など、このカードを眺め無限の可能性を秘めていたこの時代を
ふりかえって、また、新たなフアイトを燃やしてほしいと念じ、
僅かに数行を書くのにも熱がこもり、目頭を拭くことが常です。

言葉は上手でなくても、そこにその子がいて息づいている脈搏が
聞こえてくれればいいのです。先生の気負いの言葉は禁物です。そ
れはベトベトするお世辞のように偽物になるおそれがあります。

先生は誰もその子を正しく観察する眼を持っています。上から見
下ろすのではなくて、子どもの眼の高さになって子どもと話した
とき、子どもの生活が自然に見えてくるものです。カードを渡し
たあとは、その月生れの子どもたちが劇をします。幼稚園はとも
すると、クラス単位になる傾向があるので、この機会に同じ月の
仲間で行います。

一学期は、三か月間、「なかよし蝶」をします。

『赤・白・黄色の蝶々が飛んでいます。雨が降ってきたので、雨
宿りをさせてくださいと、赤いチューリップにたのみます。同じ
色の赤い蝶だけならとめてあげましょう、と言うのです。する

と、赤い蝶が言います。わたしだけ休ませてもらってもお友達が濡れてしまったのは可哀想ですから、ほかを探しましょう、と言って雨の中をお花を求めて飛んでいきます。今度は、白いゆりが咲いています。白い蝶とゆりが同じことを繰り返します。次に菜の花が咲いています。黄色の蝶と菜の花が同じ言葉を繰り返します。そして最後には、

「とうとうどこにも一緒にとめてもらえるところはないのですねえ」と言って、雨に濡れた羽根をお互いにいたわるように伏せていきます。そこでお日様がでてきます。

「友だち思いでなんと感心な蝶々だろう。よし、照らして暖かくしてあげよう」と言って蝶々のまわりを回ります。羽根が少しずつ乾いてきて、風にのっておどれるようになります。」

このお話の作者は知らないのですが絵本より劇になおしています。

四月は劇あそびまでに発展しなくても、こちらが意図して与えたものでも、それが子どもの生活の中に浸透して遊んでいるうちに、自然に言葉になって生活になってくるような気がするのです。

年代こそ違え、女学生の頃、啄木の歌を覚え光太郎の詩を口ずさみ、ヘッセの詩を暗記し芭蕉の句に傾倒し、それがいろいろな形で、今でも生活の中にてくるものです。詩は覚えるものと誰

も教えてくれなくても、それがテストとの関係もなく、生活の一部だったのでしょうか。

そんな意味も含めて、この大切な時期に、共に生きるよろこびを、美しい言葉との出会いによって全うしたいのです。

「なかよし蝶」を五月、六月と繰り返すうちに、いつの間にかせりふが言葉になり、更に子ども自身の言葉もつけ加えられて、部屋の間で、園庭で、木影で、なかよし蝶が誕生してきます。お日様になりたい男の子が沢山いて、いくつものお日様が顔をだしてきます。部屋の関係で別々に行なう年少組のお誕生会にも、その劇を年長組がやってみせてあげます。お日様がでてくると、見ている子どもたちの表情も明るくなり、思わず拍手がおこります。

二学期の前半は子どもが興味を示したことを一緒に劇や紙芝居にし、後半には、「笠地蔵」をします。雪の中に立っているお地蔵さまに、売り物の笠を全部かぶせ、自分の笠まであげてしまったやさしいおじいさん——。

「それはよいことをなさいましたね。なにはなくても丈夫でお正月が迎えられますもの」と、迎えたおばあさん——、このやさしさは、子どもたち自身が生れながらに持っている心なのでしよう。自然に会話が流れてきます。

クリスマス会の時も、今度は十二月生れの子どもたちが、全員のお母様方に同じ劇をお見せします。懐かしい童話の世界といろりの火の匂ってくるような言葉が、狭い会場いっぱいに繰りひろげられ、子どもたちの可愛さと相俟ってほのぼのとした雰囲気の中に包まれ、いつの間にか観客席の皆がこの主人公になっているような気がします。少なくともこの劇を見ていた瞬間は、ほおかぶりをして雪の中を歩いたおじいさんに、そして喜んで迎えたおばあさんになっています。このままの気持ちで新しい年を迎えてほしいと念じながら幕がおります。

三学期は、ごっこ遊びの中からの劇や、又は日常の生活の中から生まれたものを、子どもたち自身が絵ばなし（模造紙二枚綴りのを十枚前後）にしてやります。たとえば、劇では、三か月間「みにくいあひるの子」をしたこともあり、絵ばなしでは、雪が降った日、セキセイインコのお父さんが死んで、その死体のまわりに、母親と子どもたち五羽が身体を寄せて首をすくめて動かないで悲しんでいたことがありました。それを子どもたちが発見し、次の世界を創造して描いたことがあります。

また、先生方がつくった指人形や、ペープサートもします。練習不足だと本当のものはだせません。準備も完全にしないと、つまらないものになってしまいます。なにによらず、繰り返し努力

することが自信につながるものなのでしょう。

何年前の『幼児の教育』に、周郷先生と思田孫一先生との対談が載っていました。串田先生がその中で、

「幼稚園時代で一番印象に残っているのは、女の子がつくってくれたさつま芋の茶きんしぼりだ」と言われていました。そしてそれを素敵なことだとおっしゃった

周郷先生に、更に感銘を覚えました。口先だけの学者の念仏ではなく、身をもって自然を愛する先生方のお話に共鳴し、それ以来、茶きんしぼりの話が頭のどこかにこびりついていて離れませんでした。しかし、人数とか、設備とかで、なかなか実行に移せないでもたもたしています。

自然とのかかわりの中で生まれた行事を、どうしたら人工着色しないで、その素朴なもち味がだせるかと思えます。ただ子どもが喜べばいいという一方的なご機嫌とりの行事は、ガラガラした色彩の玩具や、人工甘味料の食べ物で飾るのと同じことでしょ。それにはどうしたらいいのでしょうか。

まず大人自身が木の香りがわかり、自然の色が見え、小鳥のさえずりが聞こえ、子どもの感覚になることが大切なことなのでしょう。

(市ヶ尾幼稚園)